



令和7年度 果樹情報 第16号

(令和7年11月6日)

福島県農林水産部農業振興課



1 気象概況 (10月後半、果樹研究所)

平均気温は、第4半旬が16.0℃で平年より1.6℃高く、第5半旬が10.9℃で平年より2.2℃低く、第6半旬が10.9℃で平年より1.4℃低く経過しました。

この期間の降水量は92.0mmで平年比197%と平年より多くなりました。日照時間は81.8時間で平年比93%と平年並でした。

2 土壌水分 (11月4日現在、果樹研究所)

11月3日時点の土壌水分 (pF値: 果樹研究所なしほ場: 草生・無かん水) は、深さ20cmで1.9、深さ40cmで1.7、深さ60cmで1.6となっており、概ね適湿状態です (図1)。

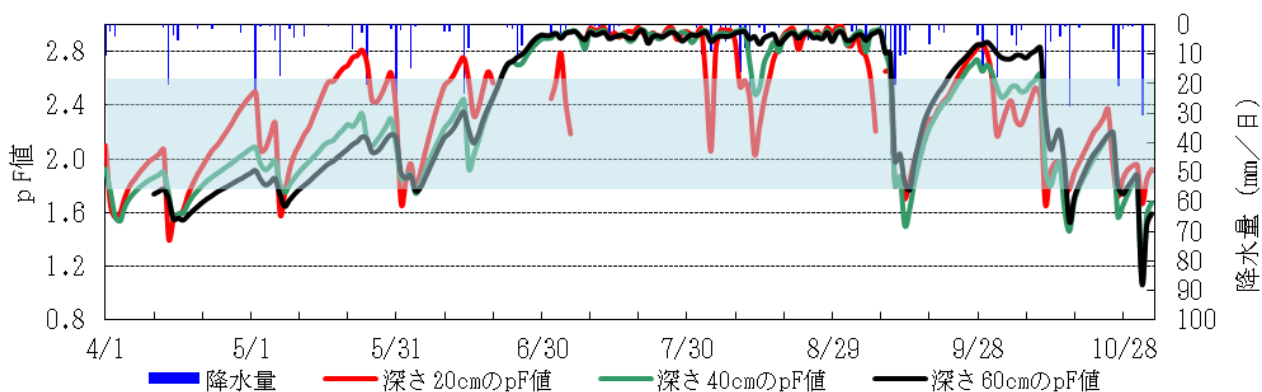


図1 土壌 pF 値の推移(果樹研究所なしほ場:草生・無かん水)

図中の網掛け部は、適湿の範囲(pF1.8-2.6)

3 発育状況 (11月4日現在、果樹研究所)

(1) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径が80.7mm(平年比95%)、横径が86.5mm(平年比95%)と平年並の状況です。

満開後日数で比較すると、平年より小さい状況です。

イ 収穫状況

「シナノスイート」(M9ナガノ台)の収穫開始日は10月14日と平年より8日遅く、昨年より4日遅くなりました(表1)。果実の大きさは294gで平年より小さく、糖度は14.5°Brixで平年並でした。

「王林」(マルバカイドウ台)の収穫開始日は、10月24日で平年並でした。10月24日(満開後190日)収穫時の果実品質(参考値)は、果実の大きさが321g、糖度が14.5°Brixとともに平年並でした。

ウ 成熟状況

「ふじ」の満開後188日(10月29日)における成熟調査の結果は、果実硬度が14.0ポンドと平年よりやや高く、デンプン指数が4.1で平年より低く、糖度は13.8°Brixで平年よりやや低く、リンゴ酸含量は0.40mg/100mlで平年並でした(図2、3)。果皮中クロロフィル含量は平年よりかなり高く、果皮中アントシアニン含量は平年よりかなり低い状況です(図4、5)。

表1 りんごの収穫状況

品種	収穫開始日			収穫盛期			収穫終期			果実重(g)			糖度(° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
つがる	8/22	8/27	8/23	8/25	8/31	8/28	8/29	9/ 6	9/ 2	265	285	297	13.6	12.4	13.8
シナノスイート	10/14	10/ 6	10/10	10/20	10/10	10/15	10/23	10/15	10/21	294	344	292	14.5	14.7	15.2
王林	10/24	10/24	10/22	未	10/26	11/ 3	未	10/30	11/ 7	321	310	323	14.5	14.2	13.8
ふじ	未	11/14	11/16	未	11/17	11/18	未	11/25	11/28	未	358	334	未	15.5	14.7

注) 平年値は、1991～2020 年（「シナノスイート」は2012～2020 年）の平均。下線の値は、参考値。
「つがる」はM.26 台、「シナノスイート」はM9 ナガノ台、「王林」「ふじ」はマルバカイドウ台

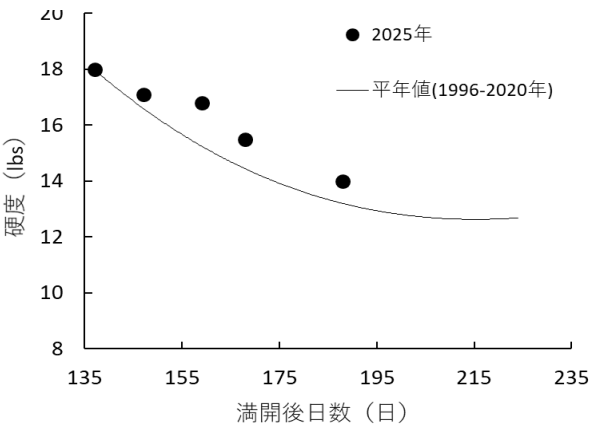


図2 「ふじ」の果実硬度の推移

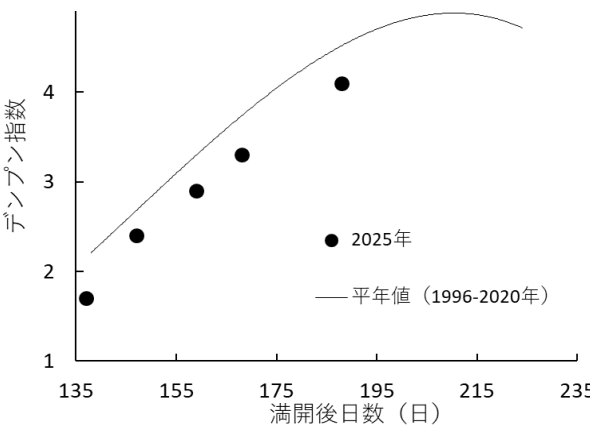


図3 「ふじ」のデンプン指数の推移

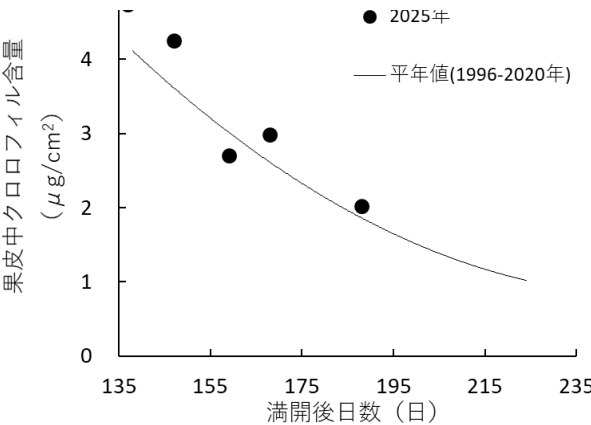


図4 「ふじ」の果皮中クロロフィル含量の推移

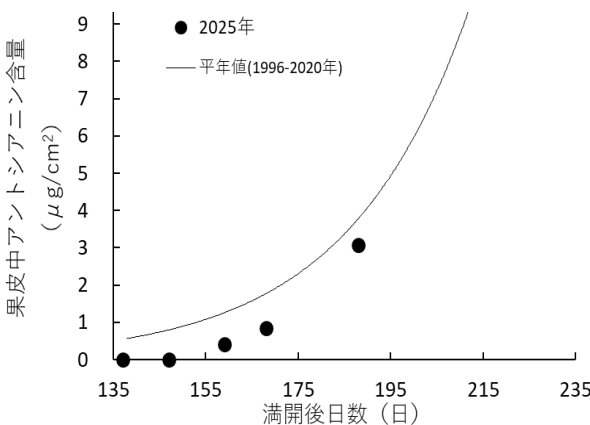


図5 「ふじ」の果皮中アントシアニン含量の推移

エ 「ふじ」の裂果発生状況

満開後 188 日（10 月 29 日）における「ふじ」／マルバ台果実の外部裂果率は 0％で過去 3 年間と比較して少なく、内部裂果発生率は 20.0％と過去 2 年間と比較して多い傾向でした（表 2）。

表2 りんご「ふじ」の裂果発生状況（満開後 190 日ころ）

調査樹	樹齢	外部裂果率（％）				内部裂果発生率（％）			
		2025	2024	2023	2022	2025	2024	2023	2022
ふじ/マルバ台	23	0	0	6.7	20.0	20.0	6.7	13.3	36.7

4 栽培上の留意点

(1) りんご

ア 「ふじ」の収穫

収穫に当たっては、蜜入りの状態に加えて、果実の着色、地色及び食味等により総合的に判断しましょう。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病害

ア ナシ黒星病

秋期防除は、翌年の伝染源となるりん片への感染予防に重要です。重要な防除時期は、りん片生組織の露出(図6)が多くなる頃(果樹研究所では10月上旬～11月上旬)となります(図7)

(参考：令和4年度普及に移しうる成果 (<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachm ent/566356.pdf>))。薬剤散布は、オーソサイド水和剤 80 を 600 倍で使用し、2 週間間隔で 2 ～ 3 回散布(キャプタンの総使用回数に注意)し、最終散布は落葉率 80%頃を目安に実施します。また、薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、薬液が棚上まで十分量かかるよう丁寧に行いましょう。

なお、10 月 31 日時点の果樹研究所「幸水」予備枝におけるりん片生組織の露出芽率は 41.4% で、10 月 21 日時点(29.5%)から増加傾向にあります。今後さらに芽の露出が増加するものと見込まれるため、気象情報に留意して適期に薬剤散布を実施しましょう。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。2 回目以降の散布では、薬剤のかかり具合を確認し、新梢管理を見直しましょう。

また、園内外の秋型病斑が認められる罹病葉を含む落葉は、翌年の伝染源となるため、適切に処理しましょう。処理方法は、丁寧に集めて土中に埋めるなど適切に処分するか、乗用草刈機またはフレールモアによる粉碎処理(図8)により、落葉が500円玉程度の大きさになるまで丁寧に粉碎しましょう(図9)。



図6 露出した芽りん片生組織(杵内)

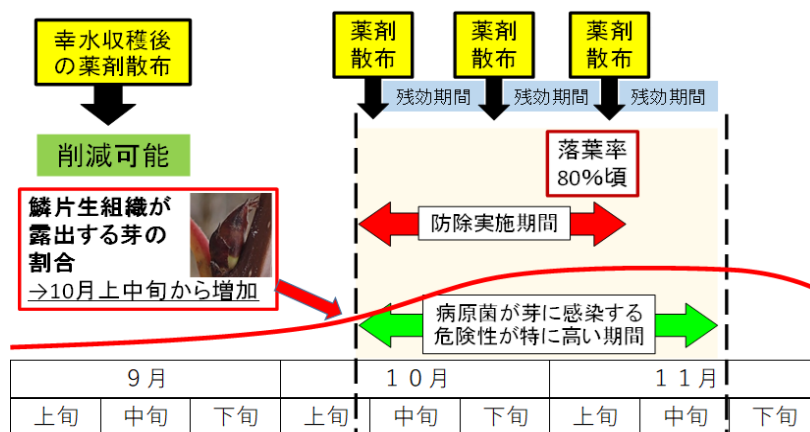


図7 なし及び病原菌の生態に基づく秋期防除の考え方



図8 粉碎処理の状況
(写真：農業総合センター果樹研究所)



図9 粉碎処理の目安
(写真：農業総合センター果樹研究所)

～ 来季用の貯蔵花粉の備えは充分ですか？ ～

国は、中国において火傷病(かしょうびょう)が発生したことを受け、令和5年8月30日に中国からの火傷病菌の宿主となる植物(花粉等)の日本への輸入を停止しました。これにより、中国産のなし及びりんご花粉の供給が停止されるとともに使用ができません。

- 貯蔵花粉が不足する場合には、自家採取等による花粉の確保に努めてください。
- 結実安定に向けた受粉樹の導入を検討しましょう。

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344
(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>